

# “なぞなぞかるた”の面白さ

— 「保育文化財」の視点から —

池田 邦子

奈良文化女子短期大学

On the Nazonazo Karuta (Japanese Karuta with Riddle Game)

for Early Childhood Education

Kuniko Ikeda

*Narabunka Women's college*

本稿は、“なぞなぞ”やクイズ・パズルの要素が取り入れられた“かるた”として、『かげえなぞなぞかるた』（学習研究社）と『かるた なぞなぞはかせ』（ひかりのくに）、『なぞなぞかるた』（メイト）を取り上げ、その比較検討を行うとともに、それらが持つ「保育文化財」としての魅力を探ったものである。

キーワード：なぞなぞかるた、保育文化財、知育玩具、教具、ことば遊び

## 1. 本稿の課題

“かるた（歌留多、骨牌）”とは、読み札にあわせた絵札（取り札）を取って、枚数を競う遊び（玩具）を意味するものである（花札を含めて“かるた”と呼ぶ場合も見られる<sup>1)</sup>）。その語源は、ポルトガル語の‘carta’（手紙あるいは紙板状のものなど）に由来し、元々は天正時代に伝来したトランプなどのカードゲーム一般を指すものであった。しかし、同様の遊戯は日本とポルトガルとの接触前からあったものと考えられ、もともとの起源は、平安時代の貴族の遊び、すなわち二枚貝の貝殻を合わせる「貝覆い（貝合せ）」にまで遡ることができるという。これとヨーロッパ由来のカードゲームが融合し、百人一首に加えて、元禄時代頃には“いろはかるた”も作られはじめ、今日のような遊び方が主流になったとされる。“かるた”には、「いくつか種類があり、大きく賭博系と遊戯系に分けることができる」と言われ、「賭博系には『天正かるた』『うんすんかるた』『花札（花がるた）』『かぶ札』などがあり、遊戯系は『歌がるた（百人一首）』『いろはがるた』『お化けかるた』などで、カルタとりをして遊ぶものである<sup>2)</sup>。

古くから遊ばれてきた“かるた”は、牛島義友によれば、「注意、再認、選択、反応、自制心、競争

心の総合遊戯」であるとされる<sup>3)</sup>。また、それは、片岡秀子も、「読み手（聴覚刺激）と絵カード（視覚刺激）とを伴って学習が成立する特徴をもって」おり、「ことば（文）と絵（物・場面・動き）を対応させて意味づけをしていき、理解できることばを育てていく」ことができるとしている<sup>4)</sup>。“かるた”には、言葉に対する認識や思考力を高めること、ことわざの教訓などが遊びの中に含まれており、ただ単に楽しむためだけのカードゲームではなく、「玩具（遊具）」の形を取った「教具」としてとらえることも可能である点で、今日的にも、「保育教材」の観点から注目に値するものと考えられる。

一方、“なぞなぞ（謎謎、何ぞ何ぞ）”は、言葉や文章などの中に、ある意味を隠して問いかけ、その意味を当てさせる遊びである。それは、世界各地で古代より行われていた遊びであり、日本においては、左右に分かれて謎を出す「なぞなぞ合（あはせ）」なる遊戯が、平安時代に書かれた『枕草子』などの中で、宮廷のあそびとして取りあげられている<sup>5)</sup>。また、中世以降は「なぞ」と呼ばれ始め、鎌倉時代に記された『徒然草』の中でも登場しており、室町時代には問答集『なぞだて』などの本もまとめられた。そして、江戸時代の「洒落」文化による洗練を経て、今日に至る。歴史的に見て、「ことば遊び」の中核を占めるのは、なぞ〔なぞ〕である」と言っても過言ではないのである<sup>6)</sup>。

このようにして、同様に昔から遊ばれてきた“なぞなぞ”は、子どもが言葉や身のまわりに存在するものを知り、物事の内容や性質、しくみ、イメージなどへの理解を深める機会となる<sup>7)</sup>。また、言葉のやりとりによって楽しむという点では、コミュニケーション能力を高めていく上で重要な「ことば遊び」の1つでもある。特に、幼児期の子どもに対しては、楽しみながら言葉や知識を身に付けることができる点で、「かしこさ」を育てる教材として、保育実践へと積極的に取り入れられる必要がある。本稿では、“なぞなぞ”やクイズ・パズルなどの要素が取り入れられた“かるた”として、『かげえなぞなぞかるた』（学習研究社）及び『かるた なぞなぞはかせ』（ひかりのくに）、『なぞなぞかるた』（メイト）を取り上げ、それらの比較検討を行う。そして、その検討を踏まえ、教育的な視点から、“なぞなぞかるた”が持つ「保育文化財」としての魅力を探りたい。

## 2. “なぞなぞかるた”という玩具

### 2.1 『かげえなぞなぞかるた』（学習研究社）

いわゆる“なぞなぞかるた”は、保育系出版社や教具会社、玩具会社などから、これまで数多くの商品が販売されてきている。大部分が幼稚園・保育所への直販商品とされており、しかも玩具として扱われるため、ほとんどのものが使い捨てられ、書籍などのように収集・保存されることもない。それゆえに、分析の対象とされてこなかったし、その全体像を踏まえて検討することも極めて難しい。とはいえ、今回の調査でたまたま入手できた3つの商品（中古品）は、いずれも保育系出版社によって製作されたものであり、「保育文化財」としての魅力を探る素材として格好の教育玩具であると考えられる。

手元にあるもので最も古いのが『かげえなぞなぞかるた』（学習研究社）であり、発売元への聞き取りによれば、2001（平成13）年に初版が販売されているという（以下、学研版と呼ぶ）。この“かるた”は、読み札・絵札（取り札）が「を」と「ん」を含む全46組での構成である。読み札は、縦8.3cm、横

5.5cmの長方形となっており、表面は、「あ」を例に取れば、「あさ さいて ひるには しぼむ なつのはな なあに」という文章が中央にある。そして、その左下には小さく「あさがお」と答えが書かれている。また、裏面には何も書かれていない。一方、絵札（取り札）は、縦8.3cm、横5.5cmの大きさで、中央に「あさがお」が描かれ、右上に「あ」の文字もある。そして、その裏面中央には「あさがお」の影絵が、その右上には「あ」の文字がそれぞれ表面と同じく配置されている。

全46組の“なぞなぞ”の問いと答えは、どのようになっているのであろうか。それは、次の通りである。

あ	あさ さいて ひるには しぼむ はな なあに	あさがお
い	いえを かついで のんびり おさんぽ だあれ	かたつむり
う	うみにいる いちばんおおきな どうぶつ だあれ	くじら
え	えんとつから プレゼントを もってくるの だあれ	サンタクロース
お	おおきいつので ちからもちの なつむし だあれ	かぶとむし
か	かたいこうらに かおとあし ひっこめるの だあれ	かめ
き	きいろいふくきた おいしいくだもの なあに	バナナ
く	くろいろ カアカア なくの だあれ	からす
け	けむりをだして シュッポップ はしるの なあに	きしゃ
こ	こおりのうえを よちよち あるくの だあれ	ペンギン
さ	さんかく しかく つんで あそぶもの なあに	つみき
し	しろとくろの しまもよう だあれ	しまうま
す	すみふいて 8ぼんあしで およぐの だあれ	たこ
せ	せんろのうえを ガタゴト はしるのりもの なあに	でんしゃ
そ	そら たかく ドーンと さく はな なあに	はなび
た	たてがみを りっぱな おとうさん だあれ	ライオン
ち	ちくちくいたい とげのふくきた おいしいもの なあに	くり
つ	つのがりっぱ きの えだみたい だあれ	しか
て	てで かいを カンカンわるの だあれ	らっこ
と	とがった はが たくさんならんだ おおきな くち だあれ	わに
な	ながいくび きいろと ちゃいろのもようは だあれ	きりん
に	にんじん だいすき みみがながいの だあれ	うさぎ
ぬ	ぬれてもへいき あめふり だいすき だあれ	かえる
ね	ねこがにがて チュウチュウ にげるの だあれ	ねずみ
の	のびるはしご ひをけすのりもの なあに	しょうぼうしゃ
は	はさみをチョコチョコキ よこにあるくの だあれ	かに
ひ	ひをふいて うちゅうへ とびだすのりもの なあに	ロケット
ふ	ふたつのくるま リンリンはしるのりもの なあに	じてんしゃ
へ	へいのうえ じょうずに ニャンニャン あるくの だあれ	ねこ

ほ	ほそながいからだで によろによろうごくの だあれ	へび
ま	まあるいかおが おひめさまみたいな なつのはな なあに	ひまわり
み	みずあびプシュー ながいはな だあれ	ぞう
む	むらさきのつぶつぶ いっぱいのくだもの なあに	ぶどう
め	めがねみたいな おおきなめ すいすいとぶむし だあれ	とんぼ
も	もりのなか たくさんならんだ ちいさなかさ なあに	きのこ
や	やねのうえ チュンチュンおしゃべり だあれ	すずめ
ゆ	ゆうびんを たくさんたべるあかいかお なあに	ポスト
よ	よるひかる そらのほうせき なあに	ほし
ら	らくだよさばくでひとを のせるの だあれ	らくだ
り	りくとうみをひとつとび おおきなりのもの なあに	ひこうき
る	るすばんじょうず ワンワンなくの だあれ	いぬ
れ	れつをつくって ガアガア あるくの だあれ	あひる
ろ	ろうそく たてて おめでどう クリームいっぱい なあに	ケーキ
わ	わたに なった あまいおかし なあに	ドーナツ
を	どんぐりを カリカリ きのほりじょうず だあれ	りす
ん	じまんは かわいいしろくろもよう ささを たべるの だあれ	パンダ

『かげえなぞなぞかるた』(学習研究社)

## 2.2 『かるた なぞなぞはかせ』(ひかりのくに)

2つめの『かるた なぞなぞはかせ』(ひかりのくに)は、発売元によれば、2003(平成15)年に初版を出し、2006(平成18)年には再版を作ったという(以下、ひかり版と呼ぶ)。この“かるた”は、「を」と「ん」を除いて、読み札・絵札(取り札)が全44組で構成されている。読み札は、縦7.5cm、横4.8cmの長方形であり、例えば「あ」では、「あさ いちばんに さく なつのはな」という文章が表面中央に、「なあに」という問いかけが左下に記されている。また、その右下には、赤字で小さく「あさがお」と答えが書かれてある。そして、読み札の裏面中央にはカタカナで大きく「ア」と書かれ、その左上に平仮名で小さく「あ」の1文字も置かれている。また、下から3分の1あたりのところに横線も引かれており、「ア」で始まる3つの単語が、「アヒル」「アメ」「アシ」といった具合に並ぶ。一方、絵札(取り札)は、縦7.5cm、横4.8cmの大きさで、その表面には、読み札の答えがイラストで全面に描かれ、「あ」の札では、「あさがお」が日の出に咲く場面となっている。裏面も、基本的に読み札と同様の構成ではあるものの、ただ違うのは、文字が平仮名で書かれているということである。具体的には、中央に平仮名で大きく「あ」と書かれ、その左上に「ア」とカタカナで小さく記されている。また、下から3分の1あたりに横線が引いてあり、「あひる」「あめ」「あし」と、「あ」から始まる単語が3つ並ぶ。

全44組の“なぞなぞ”の問いと答えは、どのようになっているだろうか。それは、次の通りである。

あ	あさ いちばんに さく なつのはな	なあに	あさがお
い	いほいほ いっぱい あし 10ぼん	なあに	いか

う	うみや ぷうるで つかう どおなつ	なあに	うきわ
え	えを かいたり じを かいたり べんりな ほう	なあに	えんぴつ
お	おるだけで へんしんする ふしぎな かみ	なあに	おりがみ
か	かけっこすると どこまでも ついてくる まねっこ	なあに	かげ
き	きんを みたら ぎよっと おどろく さかな	なあに	きんぎょ
く	くろくなると あめを ふらす しろいもの	なあに	くも
け	けすたびに からだが ちいさくなるもの	なあに	けしごむ
こ	こどものひに そらで およぐ さかな	なあに	こいのぼり
さ	さばくでも げんきに そだつ はり いっぱい	なあに	さぼてん
し	しろとくろの しまもようの どうぶつ	なあに	しまうま
す	すなばで つかう べんりな こっぷ	なあに	すこっぷ
せ	せっせと ふたをとる はたらきもの	なあに	せんぬき
そ	そっちのごみも あっちのごみも たべちゃうもの	なあに	そうじき
た	たねがわたげで たんでいく きいろい はな	なあに	たんぼぼ
ち	ちいさなごみを きれいにとる ほうきと なかよし	なあに	ちりとり
つ	つんつん はるに かおをだす すぎなの こ	なあに	つくし
て	てを 入れると あたたかい ふくろ	なあに	てぶくろ
と	とまらずに ぐるぐるまわって じかんを しらせるもの	なあに	とけい
な	ないって いうけれど ほんとうは ある くだもの	なあに	なし
に	にっこりしたら まけちゃうよ 「あっぷっぷ」	なあに	にらめっこ
ぬ	ぬると きれいな えが できあがり	なあに	ぬりえ
ね	ねながら ふとんに ちずを かくのは	なあに	ねしょうべん
の	のっぼの きも ぎざぎざの はで きてしまうもの	なあに	のこぎり
は	はの うえを いったりきたり おそうじするもの	なあに	はぼらし
ひ	ひなたが だいすき おおきな なつの はな	なあに	ひまわり
ふ	ふくれて おこる うみの さかな	なあに	ふぐ
へ	へきだよ かみなり なったら てで かくそう	なあに	へそ
ほ	ほそい からだ もじゃもじゃあたまの きれいずき	なあに	ほうき
ま	まいにち ねるとき あたまを のせるもの	なあに	まくら
み	みぎと ひだり ひとつずつ ある み	なあに	みみ
む	むしも おおきく みえる めがね	なあに	むしめがね
め	めは おおきく からだは ちいさい さかな	なあに	めだか
も	もぐるの だいすき とんねるづくりの めいじん	なあに	もぐら
や	やさしい かおに しろいひげ かみを むしゃむしゃ	なあに	やぎ
ゆ	ゆらゆらと よるに みんなを おどろかすもの	なあに	ゆうれい

よ	よみせの	ぷうるに	およぐ	ふうせん	なあに	ヨーヨー (よおよお)	
ら	らくらくと	かたいかいも	おなかで	わるよ	なあに	らっこ	
り	りっぱな	しっぽの	きのぼり	めいじん	なあに	りす	
る	るるるる	ピーを	なったら	ごようを	どうぞ	なあに	るすばんでんわ
れ	れの	つく	ぞうの	はいつている	つめたい	はこなあに	れいぞうこ
ろ	ろくさいで	ろっぼん	けえきに	たてるもの	なあに	ろうそく	
わ	わっても	おこられない	しょくじに	つかうもの	なあに	わりばし	

『かるたなぞなぞはかせ』(ひかりのくに)

### 2.3 『なぞなぞかるた』(メイト)

3つめの『なぞなぞかるた』(メイト)は、発売元によれば、2004(平成16)年に初版が、2006(平成18)年と2008(平成20)年に再版が製作・販売されたという(以下、メイト版と呼ぶ)。この“なぞなぞかるた”は、「を」と「ん」を含んで、読み札・絵札(取り札)が全46組で構成されている。読み札は、縦8.0cm、横5.0cmの長方形で、「あいさつは てと てで ゑゆげゆげゆ よろしくね」(あくしゆ)、「いいつけ まもって おてに おすわり おるすばん」(いぬ)、「うめの きで ほうほけきょうと うたってる」(うぐいす)という文章が表面に書かれていく。そして、それぞれの読み札の左下に括弧書きで答えも示されてある。また、裏面には平仮名の「あ」が中央に置かれ、その筆順も、「①とめる、②とめる、③はらう」というように順番を付けて示している。さらに、その左上には小さくカタカナの「ア」も書いてある。一方、絵札(取り札)は、縦8.0cm、横7.0cmのほぼ正方形に近い形をし、その表面は読み札の答えが、「あ」の札であれば、男の子と女の子が絵の中央で握手をしている様子として描かれている。また、裏面には中央にアイスクリームの絵があり、その右に「⑦アイスクリーム」とある。左上には、ジャンケンができるように「ゲー」の絵も描かれている。また、左下には平仮名の「あ」も書かれてある。

全46組の“なぞなぞ”の問いと答えは、どのようになっているのか。それは、次の通りである。

あ	あいさつは	てとてで	げゆげゆげゆ	よろしくね	あくしゆ		
い	いいつけ	まもって	おてに	おすわり	おるすばん	いぬ	
う	うめの	きで	ほうほけきょうと	うたってる	うぐいす		
え	えを	みて	たのしい	おはなし	よんでね	きかせてね	えほん
お	おお	こわい	くらやみから	ひゅー	どろろ	おばけ	
か	かけて	おでかけ	しっかり	とじまり	これで	あんしん	かぎ
き	きこえるかい	とりが	とんとん	きを	たたく	きつつき	
く	くぎを	つかわずに	じょうずに	つくるよ	いと	いえ	くも
け	けいれいして	ごくろうさまです	パトロール				けいさつかん
こ	こどもの	ひ	そらで	げんきに	およいでる		こいのぼり
さ	さんかく	せびれの	うみの	あばれもの	ようじん	ごようじん	さめ
し	しゅっぱつ	しんこう!	せかい	いち	はやい	でんしゃ	しんかんせん

す	すわって たって てを ついて たちます はっけよい	すもう
せ	せんとくものを ぐるぐる まわして あります	せんとくき
そ	そうれ、ゴミも ほこりも すいこんで きれいに するよ	そうじき
た	たねの たび わたげに のって とおくまで	たんぼぼ
ち	ちくり！ でも なかないよ うーんと がまん	ちゅうしゃ
つ	つんでは くずす ちいさな きの おもちゃ	つみき
て	てんきに してね あしたは うんどうかい	てるてるぼうず
と	とんでるよ おおきな めだまで そらを すーいすい	とんぼ
な	なんでだろう うれしい ときも かなしい ときも てるよ	なみだ
に	にらんで へんな かおして あっぷっぷ	にらめっこ
ぬ	ぬので つくった かわいい どうぶつの おにんぎょう	ぬいぐるみ
ね	ねこは だいきらい あなの なかに にげろ にげろ	ねずみ
の	のみものが ごくん ごくんと とおる みち	のど
は	はなから はなへ はちが とんで あつめて くるよ	はちみつ
ひ	ひらいた ひらいた せいたかのっぼの なつの はな	ひまわり
ふ	ふゆに あつくなって なつには うすく なるよ	ふとん
へ	へこんで いる ところが からだの まんなか	へそ
ほ	ほしみたいに ひかって とんで いる なつの むし	ほたる
ま	まあるくなって よるの そらに うかんで いる	まんげつ
み	みのを きて えだに さがって ふゆじたく	みのむし
む	むずむず ずきずき はみがきしないと あばれだす	むしば
め	めを さませ！ まくらもとで おおさわぎ	めざましどけい
も	もう たべて いいよの あいずは ふくれて ぷー	もち
や	やけたかな たきびの なかで ほっくほく	やきいも
ゆ	ゆすってあげる すてきな ゆめを みるように	ゆりかご
よ	よちよちあるきの あかちゃんの むねにかかっているよ	よだれかけ
ら	らくらくと にもつを せおって さばくを おうだん	らくだ
り	りょうでで むすぶ きれいな ちょうちょ ほら おにあい	りぼん
る	るるるる……ベルが なったら おしゃべり おるすばん	るすばんでんわ
れ	れつになってひとがならんでまってるおいしいおみせ	レストラン
ろ	ろばくんも おたんじょうびの ケーキに たてる	ろうそく
わ	わたしから ひとつもじ とったら どんな とり？	わし
を	たのしく あそぶと ことばを おぼえるよ	なぞなぞかるた
ん	ぶらん ぶらん こうえんで ゆれて いる	ブランコ

『なぞなぞかるた』(メイト)

いずれの“なぞなぞかるた”も、読み札の最初の1文字が、絵札（取り札）の片隅に書かれている円内の1文字や絵で示した単語（“なぞなぞ”の答え）の冒頭1文字と同じものであり、一応“かるた”としての形式は守っている。読み手が出す声の最初の1音を聞いて、絵札（取り札）に書かれた円内の1文字を確認し、その札に手を伸ばすというパターンは可能である。もし、そうした形式が守られていなければ、“かるた”ではなく、単なる“なぞなぞ”をカード化したものになってしまう。

### 3. “なぞなぞかるた”を比較検討してみる

今回入手できた3つの商品には、前述したような形で、それぞれ特徴があった。学研版は、その名の通り、ヒントを入れる仕組みとして「影絵」を用いている。また、ひかり版では、いわゆる“五十音カード”としても使えるように裏面が工夫されていた。さらに、メイト版は、絵札（取り札）の裏面を絵入り・じゃんけん機能つきの“五十音カード”に、読み札の裏面を平仮名の筆順が示されたものにして、使い方次第で多様な役目をするように手が加えられている。

ところで、これら3つの商品には、相互で類似した“なぞなぞ”の札が見られながらも、読み札へと書かれた出題の文章には違いがある。例えば、前に札の例として取り上げた「あ」では、学研版とひかり版が答えを「あさがお」にしていた（図1）。学研版の読み札は「あさ さいて ひるには しほむ なつの はな なあに」であり、ひかり版では「あさ いちばんに さく なつのはな [なあに]」となっている。前者は、大まかに分節してみると、「あさ さいて」「ひるには しほむ」「なつの」「はな」という4つの特性を並べていく形である。後者では、「あさ いちばんに さく」「なつの」「はな」という3つの特性の組み合わせになっている。両者とも、「なつの」「はな」である点は共通しているものの、「あさ さいて」「ひるには しほむ」と「あさ いちばんに さく」とでは非常に大きな違いがある。「あさ いちばんに さく」という文章表現は、一見「あさがお」の特徴を述べているようで、「朝、一番初めに咲く花」ならば、どれでも該当してしまう。一方、「あさ さいて」「ひるには しほむ」は、「あさがお」の植物としての特徴を明確に示す文章である。

また、絵札（取り札）に描かれた「あさがお」の絵は、どうなっているのか。学研版は、「あさがお」のみが実物に近い形で描かれており、ひかり版では、擬人化された「あさがお」に加え、背景の山あいから同じく擬人化された太陽が顔を見せる様子も描いている（図1）。前者は、“学研の「科学」と「学習」”のスタンスと何らかの関わりがあるのか、読み札の文章も含めて、かなり自然科学的な視点に立っている。しかも、前述したように、絵札（取り札）の裏面は「影絵」になっており、そちらを使用すれば、「姿形」から答えを類推していくという体験もできよう。一方の後者は、「かるた なぞなぞはかせ」という名称ながら、「擬人化」が象徴しているように、絵札（取り札）の持つ雰囲気は、どこことなく“お話の世界”的である。それと同時に、ひかり版の両札の裏面は、“五十音カード”になっていた。しかし、学研版は、前述したように、そのようにはなっていない。

なお、残念ながら、ここでは、紙幅の都合などから、3つの“かるた”の札すべてを比較・検討し、詳細な分析をすることはできない。それについては、機会を改めることとしたい。



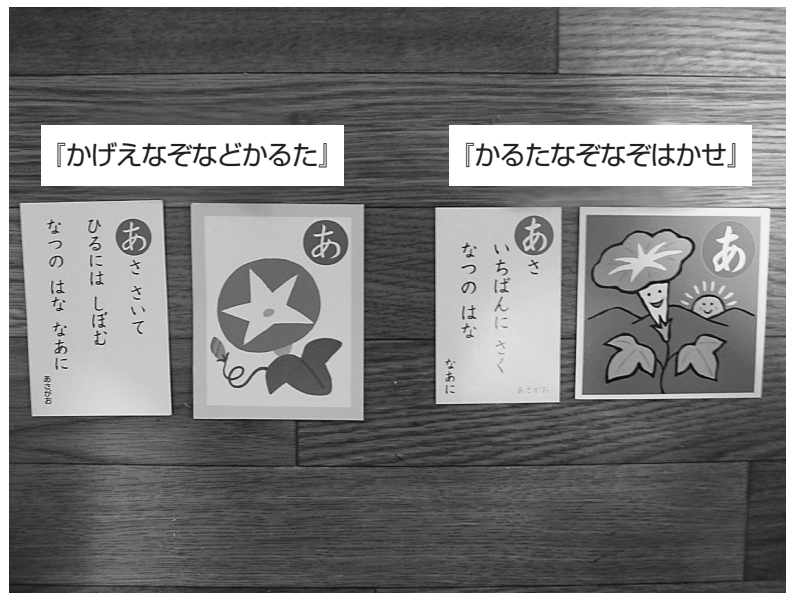


図1 『かげえなぞなどかるた』(学習研究社)と『かるたなぞなぞはかせ』(ひかりのくに)

#### 4. 「保育文化財」の視点からみた“なぞなぞかるた”

以上、本稿では、3つの“なぞなぞかるた”を取り上げて、簡単な比較検討を試みた。最後に、それを踏まえつつ、「保育文化財」としての魅力を仮説的に示してみたい。それについては、次の2点を指摘することができるであろう。

1つは、言葉による「認識」や「概念」の形成という、領域「環境」に重なる部分へと踏み込んだ遊びを提起している点である。“なぞなぞ”は、言葉だけで楽しむものではなく、身の回りの「もの・こと」との直接的・間接的なふれあいが生かされる遊びだとされる<sup>8)</sup>。また、“なぞなぞ”や“かるた”の遊びは、コミュニケーションの道具や自己表現の方法など、言葉の持つ本性から生まれたものであると同時に、「思考力」を高めるための活動としても考えられる。

例えば、領域「環境」と深く関わる遊びに「仲間集め(マッチング)」があるけれど、この遊びは『『同じ』『ちがう』』という基礎的な判断力によって、物と物との関係がより分化し、またことばの意味の理解が深まり、子どもの中にイメージがひろがって「いく」という<sup>9)</sup>。思考活動の過程では、「対象の本質的な特徴をことばで抽象化し、その特徴を一般化する機能」が重要な役目を果たしており、「特に、ことばを獲得してからは、ことばによって概念形成も促進され、概念を定着・操作させる」ことが発達課題だとされる<sup>10)</sup>。このような概念形成には、対象との直接的な体験はもちろんのこと、体験を概念と結びつけるための言葉による橋渡しが必要であり、“なぞなぞ”や「ものの名前(名前カルタ)」などの「言葉遊び」は、子どもたちにとって重要な活動となる<sup>11)</sup>。“なぞなぞかるた”(特に、学研版)は、そうした活動の面白さを体現した玩具として見ることができる。

もう1つは、“なぞなぞかるた”が、「言葉の持つ意味やイメージについて考える」過程を子どもに与

え、一般の“かるた”には見られない遊びの面白さを加えている点である。改定『保育所保育指針』における「教育」の「内容」では、「いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」（領域「言葉」）とあり、「子どもの内面に身体感覚を伴う豊かなイメージが蓄積されていくよう働きかけながら、子どもの言葉への感覚や想像力を膨らませていく」指導の意義が強調されている（同前）。

そのようなイメージが、有形である玩具を使った遊びの中で「身体感覚」として築かれていくことによって、子どもは言葉の意味を知り、対象への認識を深めていく。すなわち、「イメージに基づく認識能力は、ことばの意味を理解したり、また物の用途や特徴をきいて、その対象をいくつかの絵のなかから選び出すという発達の基礎にな」るものであり、そうしたイメージや言葉と認識が結びつく経験は、一般的な“かるた”よりも、むしろ“なぞなぞ”の趣向を凝らした“なぞなぞかるた”においてより深められると言えるだろう<sup>12)</sup>。また、そのような特性は、読み札の文章だけでなく、絵札（取り札）に描かれた絵も合わせて活用することで、“かるた”以外の「ことば遊び」を多様な形で楽しむきっかけがうまく用意されることにもなると考えられる。

※ 本稿は、日本保育学会第62回大会（2009（平成21）年5月16日（土）、於・千葉大学）における口頭発表「“なぞなぞかるた”の面白さ——『保育文化財』の視点から」のレジュメを加筆・修正したものである。

#### 引用文献

- 1) 宮本貴美子・木村浩司・大牟田市立三池カルタ記念館（2006）『カルタ』31pp. 文溪堂.
- 2) 笹間良彦（2005）『日本こどものあそび大図鑑』60pp. 遊子館.
- 3) 牛島義友（1943）『愛育の玩具』協同公社出版部. 口絵写真.
- 4) 片岡秀子「カルタあそび」（1987）（柚木馥・白崎研司編 『保育技術シリーズⅡ／ことばを育てる3——思考力を育てる』コレール社. P76.
- 5) 鈴木棠三（1975）『ことば遊び』219pp. 中公新書.
- 6) 阿刀田高（2006）『ことば遊びの楽しみ』90pp. 岩波新書.
- 7) 山下智恵「なぞなぞあそび」（1987）（柚木・白崎編 前掲書.）130-133.
- 8) 同上.
- 9) 白崎研司（1987）「マッチング」（柚木・白崎編 前掲書.）P86.
- 10) 白崎研司（1987）「思考力の発達とことば」（柚木・白崎編 前掲書.）P8.
- 11) 和田ことみ（1998）『子どもといっばい遊ぼう1 ことば・表現であそぼ——ごっこあそびから始めよう』107pp. 明治図書.
- 12) 森貞子（1987）「まちがいさがし」（柚木・白崎編 前掲書.）P110.